

自由平等の由来

丘 浅次郎

先達せんだうて或る雑誌を見たら、其中に次の様なことが書いてあつた。即ち、人類は其の本来の性質として自由を要求するものである。其の証拠には、何時の世、如何なる時代にも自由の叫びを聞かぬことは無いと論じてあつたが、之と同様の考えが他の書物や雑誌などにも屢々しばしば出て来る所から推すと、斯く信じて居る人が、世間には随分多くあるらしい。我らは此点に関して少しく異なつた説を持つて居る故、其大略を述べて、読者の参考さんこうに供しようと思ふ。

我らの議論は、生物の進化と云うことを基として、其の上に組み立てたもの故、進化を認めぬ人等には勿論もちろん通用せぬ。今日なお生物学者間に論争のあるような詳細な所には関係は無いが、少なくとも次に述べる三つの要点だけは、之を承知して居る人で無ければ、我らの論ずる所を了解することが出来ぬであろう。それ故この三ヶ条を誤りなりと考える人は、其の先を読んでも全く無駄であることを豫あらかじめめ断つて置く。

三ヶ条の第一は、生物各種は決して天地開闢かいびやくの昔から今日見る通りの種類が存在して居た訳ではなく、悉ことごとく漸々ぜんぜんの進化によつて生じ来つたもので、初めの先祖と後の子孫とは著しく異なつて居る。人間の如きも、或る時代迄溯れば、猿と人間との間の様な物で、更に其先迄溯れば、更に一層下等の動物であつた。また生物は今日何種類かに分れて居るものでも、昔に溯ると皆共同の先祖から出て居る。初め一種類であつた者の子

孫でも、甲は或る方面に、乙は他の方面に進化すれば、其の結果として、後には二種類と成らざるを得ない。人間も今でこそ、他の猿類と明に区別せられて居るが、遠い昔迄系図を探れば、猿と共同の先祖から起つたものである。之だけは、解剖学、発生学、化石学等の研究の結果、已に確なことと見做され、生物学を修めた者の中には、最早之に對して疑いを挿む人は一人も無い。

第二には、生物の有する總ての性質は、皆長い間の自然淘汰によつて今日の程度迄に発達し來つたことである。自然界には生存のために激しい競争が絶えず行われ、勝つた者は生き残り、敗けた者は亡び失せる。而して、敵に勝つ者は勝ち得るだけの性質を備えて居たことは云うまでもないが、斯かる性質の最も優れた者だけが子孫を遺せば、代の重なるに随うて其の性質は漸々発達し、終には驚くべき有力なものと成る。鷹の鋭い眼でも、鹿の速い足でも、獅子の牙でも蛇の毒でも皆斯様にして出来上つたものである。各性質を発達せしめるものは、自然淘汰の外に無いとは云われぬが、自然淘汰が働けば勝敗の標準となる性質が絶えず進歩することは確かであろう。

第三には、前の反對に、自然淘汰が働かぬときは、淘汰せられぬ性質が次第に退化することである。眞暗な洞穴の内では、視力の優劣は生存競争の勝負に關係せぬ故、眼に對する自然淘汰が行われず、其ため眼は次第に退化して、終には僅に痕跡を止めるだけと成る。アメリカの大きな洞穴の内に住する盲魚や盲蝦は斯くして生じたものである。また飛んで逃げねばならぬ様な敵の居ない所では、翼の強弱は生存上餘り問題にならず、其ため翼は段々小さくなり、終には外からは見えぬ程になる。ニュージーランドの無翼鳥（キウ）は斯くして生じたものである。人間の牙が短いのも、文明人の鼻の鈍いのも、恐らく牙や鼻を標準とした淘汰が長らく行われなかつた結果であろう。例を挙げれば、尙幾らでも有るが、何れの場合に於ても、自然淘

汰の働きが止めば、其時から退化が始まることは頗る確かなように思われる。

二

さて動物には単独の生活を営むものと、団体を造つて生活するものがある。各個単独に生活する種類では個体と個体とが相向うて戦うが、団体生活を営む種類では団体と団体とが相向うて戦する。個体間の生存競争には優つた方の個体が勝つが、団体間の生存競争には優つた方の団体が勝つ。されば長い間の自然淘汰の結果として、単独動物の各個体には、単独競争に適する性質が発達し、団体動物の各団体には、団体競争に適する性質が発達すべき筈であるが、実際の動物界を見渡すと全く其通りで、単独動物には、自己もしくは自己と子供とを護るに足るだけの性質が備わり、団体動物には、また団体として敵に負けぬだけの性質が発達して居る。

団体間の競争に於て敵に勝つために最も必要な性質は協力一致と云うことである。団体の強さは其の内の個体が悉く協力一致すると云う所にある故、聊かでも此点で敵に劣る団体は競争に勝てる見込みが無い。されば長い間、団体間の競争が続き、常に勝つた団体ののみが生き残つたとすれば、自然淘汰の結果として、此の性質が段々発達する筈であるが、事實は全く其の通りで、凡そ団体生活をする動物ならば、協力一致の行われて居ないものは決して無い。但し、之を行うために取る所の形式は、動物の種類によつて様々に違ふ。我らは嘗て或る所で「団体生活の二型」と題して此事に就いて述べたことがあるが、其の大要を摘んで云えば次の如くである。

動物の団体に協力一致の行われるには二つの型がある。一つは仮に平等の型と名づけて置くが、之は蟻や

蜜蜂などの団体に見る所のもので、各個体が生まれながらの本能に従うて行うことが、其ままの自然に協力一致の実を挙げることに成る。此類では団体内の各個体は悉く平等の位を有し、導く者も無ければ、導かれる者も無く、治める者も無ければ治められる者も無い。人が女王と呼ぶものも、実は生殖専門の職工であつて、決して他を司配する訳でもなければ、また他の尊敬を受ける訳でもない。他の一つは仮に階級の型と名づけて置くが、之は猿の団体などに見る所のもので、一団体内の腕力の最も強く、経験に最も富んで、戦争の最も巧みな一疋が大將と成つて無上の權威を振り、他は悉く其の司配を受け絶対に服従して居る。大將が死ねば、残つた者の中で腕力の最も強く、経験に最も富んで、戦争の最も巧みな者が、直に其位を継いで無上の權威を振う。威張ることと服従することとは一寸見ると正反對の如くに思われるが、実は同一物の表と裏とに過ぎず、服従に甘んずる者は、位置を換えれば、即ち大いに威張る者である。次官の前で平身低頭した課長が、次の部屋で属官を叱り飛ばすのを見ても、此事は明に知れる。一言で言うと、此の型では階級的精神が心まで染み込んで、目上の者には絶対に服従すると云う性質が生まれながらに備わつて居るのである。

同じく団体生活を営む動物であつても、平等の型と階級の型とでは協力一致の実を挙げるための形式が斯様に全く違う。而も、二者の何れが行われるとしても、結局は団体内の各個体の為すことが悉く一致して、団体が、それだけ強固になること故、型は正反對に見えても、實際はただ同一の目的を達するための異なつた手段と云うに過ぎぬ。平等の型に属する団体の間に生存競争が長く続けば、自然淘汰の結果として、生まれながらに、自己の団体のためには一身を捧げると云う本能が追々発達する。また階級の型に属する団体の間に生存競争が長く続けば、同じく自然淘汰の結果として、絶対服従の性質が益々完全に成つて行く。今日の蟻や蜜蜂の有する驚くべき団体的本能や、或る獸類の有する著しい階級制度は斯くして生じたものであろう。

但し、同じく協力一致の実を挙げるための方便とは云うても、平等の型と階級の型とでは、初めから趣向が違い、進めば進むほど互いに相遠ざかるもの故、一方の型で或る程度まで進み来つたものが、途中から遽に他の型に転ずることは到底出来ぬ。一つの型から他の型に移るには、一旦出発点まで引き返して、更に改めて出直すの外に途は無いのである。

三

人間が原始時代に如何なる生活をして居たかは、今日からは、ただ遺物や骨片などから臆測するの外は無い故、無論確かなことは分らぬが、身体の構造が如何にも猿類に似て居る所から推すと、多分猿類と同様に適度の大きさの団体を造つて、互いに相戦うて居たものと思われる。而して、また猿類に於けると同様に、各団体には一疋の大將が有つて、此の者が無上の權威を振り、残りの者は悉く絶対に服従して居たらしい。現に今日でも野蛮人には各蕃社に必ず一人の酋長があつて、無上の權力を有し、他は絶対に其の命令に従うて居るが、之は恐らく、原始時代の状態から其まま引き続き来つたものである。して見ると、人間の団体生活は、其の出発点から已に明かに階級の型に属して居たものと考えねばならぬ。

野蛮人の酋長が其の部下に対して無上の權威を振り、少しでも自分の機嫌を損じた者は其場で斬り捨てる所などを見ると、如何にも無理非道なように感ずるが、酋長に常々無上の權力を持たせて置くことは敵と戦うに當つて、我が団体を強からしめるために最も必要である。猿でも人間でも、幼いときには力も弱く、知恵も足らず、他の保護を受けねば到底生存は出来ぬ。段々成長して青年、壮年となつても、未だ世の中の経験が不充分である故、敵に対する懸引などは中々思う様にならぬ。されば斯様な動物の団体では、最も老練

なる一疋を大将と仰ぎ、總べて其の指図に従うて進退するのが最も得策である。大将の有する貴重な経験を大将一人のみの所有とし、他の者等の戦闘能率を高めるために、之を利用せぬと云うことは、頗る拙なる方法であるのみならず、銘々が未熟な考えに基づいて勝手な動作をすれば、全体の統一が缺けるために団体がきわめて薄弱にならざるを得ない。之に反して、万事を大将に委任して其の指揮に従えば、青年や壮年でも皆一かどの役に立ち、其の上、団体全部が同一の方針で進む故、敵に対して甚だ強くなる。戦時には指揮者の命令に絶対に服従することが何よりも必要であつて、命令の理由を問い返すようでは、到底戦いは出来ぬ。而して、敵に対する場合だけには、指揮者の命令に服従するが、他の時には其命令に従わぬと云うような脳髓の使い分けは頗る困難である故、大将には常々から無上の権威を持たせて置かねばならぬ。要するに、生まれて後の経験によつて次第に知恵の増すような神経系統を備えて居る動物では、団体生活を営む以上は、階級の型を採用するの外に良策は無いのである。

団体が小さい間は指揮者が一人ありさえすれば、それで充分に事が足りるが、団体が稍々大きくなると、一人の指揮者が自身で直接に全部に命令を下すことが出来なくなる。斯くなれば、酋長は部下の中から最も力も強く、経験にも富んだ者を選び出して、其者に一部の指揮を委任するの外に致し方は無いが、団体の大きさが増すに随い、斯かる指揮者も段々と数が殖えねばならぬ。斯様な次第で、階級型の団体は或る大きさに達すると、若干の指揮する者と、残餘の指揮せられる者との二階級に分れ、指揮する階級の中には、更には幾段かの細別が出来て、全体が恰も雛段の如き体裁となり、最も上に位する者は無上の権威を振り、最も下に位する者は絶対に服従し、其間の階級に居る者は、上に対しては絶対に服従しながら、下に向うては無上の権威を振う。扱この程度までに階級制度の進み来つた団体が二個相向うて戦う場合には、如何なる性質の

7

発達したものが勝つ見込みが多いかと云うに、それは矢張り服従性の一層優れた方の団体である。上の階級の者のためには身命をも擲なげつて惜しまぬと云う精神の旺盛な団体は、人数が何万人あつても心は一つであるが、此の精神の薄い団体では、一万の人数には一万の心がある故、二者が相対して戦う場合には勝敗は初めから定まつて居る。されば階級型の団体が相戦うときには、他の条件が總すべて同じとすれば、何時も服従性が一步でも先へ進んだものが勝ちを占め、斯か様な戦いが何回となく繰り返される間には、自然淘汰の働はたらきによつて服従性は次第に養成せられ、益々完全に近きものと成らざるを得ない。

人間の団体生活は初めから階級型に属した故、多少の服従性は初めから備わつて有つたであろうが、其後、団体間の激しい競争が長く続いた間に、服従性は盛に発達し來つた。階級制度と服従性とは体と用との別に過ぎぬ故、階級制度なしには服従性は行われず、服従性なしには階級制度は成り立たぬ。即ち服従性と階級制度とは常に相伴うて進み、服従性が極度まで発達すれば、階級制度も実に嚴いかめしいものと成る。何れの民族の歴史を見ても、必ず一度は斯か様な時代があるが、封建時代が丁度それに相当する。人間の服従性が如何なる程度まで達し得るかは、目前にある無数の例によつて知ることが出来るが、その何れにも通じた特徴は、人為の階級別を何よりも重んじ、上に位する者を神の如くに崇めることである。例えば、上の階級の者から褒美でも貰えば、之を無上の光榮と心得、家の宝物として子々孫々まで伝える。単に「御苦労じゃ」と一言云われただけでも嬉しくて堪たらず、直ただちに同僚に触れて廻る。或るイギリス人の話しに、其人の朋友が或る時ビクトリア女王と握手する機会を得たが、其の後決して右の手を洗わなかつたと、笑いながら云うたが、之なども服従性の発達した社会では少しも珍しいことではない。何公爵とかが買物をすれば、其店は非常に名誉として、直ただちに此事を看板にも掲げ、広告文にも載せる。また宿屋に泊れば、亭主は恐悦至極に堪えず、何

とかして此の事を後の泊り客に洩れなく示したいと思つて、何公爵御宿、何伯爵御宿と書いた大きな札を客の通路に懸けて置く。昔は將軍が鷹狩に来て腰を掛けた石とか、手を洗うた井戸とかが直ただちに史蹟名勝となり、將軍の飲む茶を運搬する際には、皆、土下座をして之を礼拝した。今は、それ程のことは無いらしいが、普通の人ですれば何でもないことを昔の殿様がすれば、新聞紙に二号活字(二三ポイントに相当。約八ミリ角)の見出しを附けて、挿絵入りで掲げられる所を見ると、服従心の程度は餘り變つては居ないように思われる。肩書きを重んじたり、席次を嚴重に定めたりするのは、階級制度の特徴として、服従性の最も露骨に現われた形であるが、其の例は餘り多くて到底枚挙に遑いとまは無ない。英雄崇拜の如きも、我らの考えによれば、服従性の盛であつた時代からの遺物である。

人間の有する服従制は前にも述べた通り、昔し人間の団体が小さくて数多くあつた頃に、団体間の生存競争に伴う自然淘汰の結果として次第に発達し來つたものであるが、若もしも此の自然淘汰が何時までも続いたならば、人間の服従性は何所どこまでも進歩し、之によつて団体の統一が保たれ、各個人には生まれながらに、服従と階級との觀念のみが脳髓に浸み通つて居て、自由とか平等とか云う如きことは夢にも見ずに終つたであらう。

四

然しかるに人間には他の団体動物には見られぬ特別の事情のために、団体間の競争が充分に行われなくなり、随つて之に伴う自然淘汰も中絶の姿となつた。特別な事情とは、人間は脳と手のとの働きの優れて居るために種々の道具を造り用いると云うことである。

団体生活を営む動物は人間の外ほかに幾らでもあるが、団体と団体とが相対して戦うときに道具を用いる動物は人間以外に一種も無い。其の結果として、人間と他の動物との間には団体発達の上に著しい相違が生じた。元来団体なるものは、他の条件が總すべて相均しい場合には、大きい方が強いに定まって居る。衆寡敵せずとは即ち此の事である。されば団体と団体とで競争する場合には出来るだけ我が団体を大きくすることが得策であるが、道具を使うことを知らぬ動物では団体の大きさに自おのずから一定の制限があつて、それ以上には大きくなり得ない。何故と云うに、餘り大きく成り過ぎると、各部分の間の連絡を保つことが困難になり、全体の統一が出来なく成つて、戦闘上、却つて不利に陥る虞おそれが生ずる。人間でも野蛮時代には道具が極めて幼稚であるために団体は到底大きくは成らぬ。酋長の叫び声の聞こえる範囲、酋長の指揮棒の見える範囲以内に集まり得る人数以上になると、命令の伝達に差支さしつかえる故、全部が進退を一にすることが出来ず、大に困難を感ずる。それ故、野蛮人には、ただ小さな蕃社が数多く並び存するだけで、国と名づくべき程の大きさには決して達せぬ。然るに人智が進むと、通信にも運輸にも段々に巧な道具を用いる故、団体は如何に大きく成つても、其為ために何の不便も起こらぬ。特に近世の如くに科学が発達し、其の利用が盛に成つて電信や電話で命令を下し、汽車や自動車で兵糧を運ぶような時代には、団体は幾ら大きくとも、其の為に差支さしつかえの生ずる如きことは決して無い。斯か様な次第で、人間の団体ばかりは、他の動物の団体とは違い、無制限に大きく成ることが出来たが、団体の大きさが或る程度を超えると、団体間の競争の勝負が非常に手間取り、且かつ一方が敗けても、全部残らず殺される訳ではなく、僅わずかに一小部分の人間が命を落すに止まり、残餘の者は相変らず生存し続けて子を産む故、団体を単位とした自然淘汰は少しも行われぬ様になる。而して、自然淘汰の働きが止めば、其時まで自然淘汰によつて養成せられ来つた性質が退化し始めることは全生物界に通じた動かすべ

からざる法則である。

団体間の生存競争が盛であつて、団体を単位とした自然淘汰が絶えず行われれば、固体生活に必要な性質が段々と発達する。而して団体生活に最も必要なことは協力一致であるが、階級型の団体では協力一致の實を挙げるには服従性に依るの外はない。それ故、人間の団体が小さくて、盛んに相戦うて居た頃には、服従性が休まずに発達し來つたが、団体が大きくなり過ぎたために、自然淘汰の働きが中絶した暁には此の性質は当然退化し始める。而して服従性の退化が或る程度まで達すると、其時に初めて、自由とか平等とか云う考えが現われ出るのである。夜が段々明けるときに暗さが減ずると同じ割合に光が増す如くに、服従と階級とが薄らぐだけ、自由と平等とが明かに成つて來る。暗さが減ずると云うても、明るさが増すと云うても、ただ用いる言葉が違うだけで事柄は全く同一である通り、自由平等の考えが現われ出ると云うのと、服従、階級の考えが消え始めると云うのとは、単に同じ事實を別の言葉で云い現して居るに過ぎぬ。

人は理屈を考えるに当たつて、銘々自分の自由に論理を進めて居る如くに感じて居るが、実は結論だけは生まれながら無意識的に胸の中に已に出来上つて居るものと見えて、服従性の発達した頃の人間は、如何なる議論を組み立てても、其の結論は何時も必ず、上の階級の者には絶対に服従せよ、之が人間の取るべき唯一の道であると言ふ所に帰着する。而して、誰も之を聞いて成る程と思ひ、少しも不審を起さぬ。然るに服従性が或る程度まで退化すると、生まれながらの脳の微細なる構造が已に幾分か變化して居る故、斯様な議論には到底承知が出来ず、昔からの階級制度が如何にも不合理に見え始める。彼も人なり、我も人なり、然るに彼は上に立つて權威を振り、我は其の下に在つて服従せねばならぬと云う理由は何所にあるかと考へては、到底我慢が出来ず、斯かる不合理なる状態に生存するよりは寧ろ生存せざる方が優しなりと思つて、「我

に自由を与えよ、然らざれば、死を与えよ（アメリカ独立に貢献したバトリ）と叫ぶに至る。而して一旦、物の見方が斯様に變化すると、其後は服従性の上に築き上げた従来の階級制度は徹頭徹尾不合理である如くに思われ、之を崩さねば人類の幸福は得られぬと信じて、今まで上の階級にあつた者等に対して激しく反抗する者が段々と出て来る。斯く成つては最早、団体の全部が協力一致することは到底六かしい。人智が進んでから人間の競争は大部分、知識の競争である故、敵なる団体に負けぬ為には、我が団体内の各員の知識を増さねばならぬが、知識を増すには教育が必要である。而して教育が進めば銘々自身で物を考える力が自然に増す故、見る物毎に、其の理由を追究し、聊かでも理屈に合はぬと思うことがあれば決して満足が出来ぬ。団体を単位とした自然淘汰が止んだために、協力一致の性質が退化し、生まれながらに有する服従性の量が著しく減少した所へ、知識が進んで何事にも理由を聞かねば承知せぬと云う性質が増して来れば、其の結果として、古来の階級制度に対する反抗は益々盛に成らざるを得ない。昔から自由の叫びの聞こえ始めるのは何時も或る程度まで文明の進んだ時であつて、野蛮人の間には嘗て此声を発した者は無い。早く文明に進んだ民族は早く自由を叫び始め、晩く文明に進んだ民族は晩く自由を叫び始め、未だ文明に進まぬ民族は今日もなお自由を叫ばずに居る。而して自由を欲する程度までに進んだ者が、自分の過去を顧み、又は未だ其の程度まで進まぬ同胞を見ると、恰も無心に眠りつつある者の如くに思われ、自分は眠りから目覚めた如くに感じ、我は他の者等よりも先に目が覚めたと云う一種の誇りを禁じ得ない。当人は勿論大に進歩した積りで居るが、裏面から見れば之は嘗て、人間の団体を強固ならしめるに有効であつた服従性が著しく退化した徴しである。

五

人間には他の動物と違って、服従性の退化に伴い、階級制度に対する反抗を一層激烈ならしめる特殊の事情が存する。人間は何をするにも必ず道具を用いるが、道具を用いる以上は、当然私有財産なるものが起り、之を貸して利を取ると云うことも始まる。また物と物とを取り換える不便を避けるために貨幣と名づける調法至極な道具が造られてからは、物の価は貨幣を標準とする様になり、物を安く買うて高く売ることを専門とする商売と云う職業を生じた。文明が開けず、道具が總て粗末であつた頃には、たとえ物を貸して利を取つても、また安く買い高く売つて、其の間で儲けても、利得は知れたもので、敢て問題に成るほどには至らなかつたろうが、道具が段々精巧になり、随つて価が甚だ高く成つて来ると、貧富の差が次第に著しく現われ、道具の進歩に比例して、其の懸隔が非常に著しく成つた。多く働いた者が多くの利を得、少なく働いた者が少ない利を得、巧な者が多く儲け、下手な者が少なく儲けると云うのならば、各人の所得に差が有つても、誰も不平の唱えようは無いが、遊んで居て莫大な金を儲ける者と、幾ら稼いでも其の日の飯が食えぬ者とが、同じ社会の中に隣び住んで居るのを見ては、富の分配の極めて不公平なることに気付かずには居られぬ。資本家の儲ける金は悉く労働者の手で造つたものである。然るに労働者には極めて少額の賃銀を与えて虐待しながら、利益の全部を資本家が壟断するのは、取りも直さず当然労働者に属すべきものを資本家が盗んで居ることに当たると考えては、一刻も我慢が出来ず、同志の者が徒党を組んで資本家に利益の分配を迫る。之は如何とも防ぎ難い成り行きで文明国にストライキの絶えぬは止むを得ない。斯くの如く資本と労働との間に激しい争闘が起れば、従来階級制度は無論その渦の中に巻き込まれ、今まで階級制度のために

過分の利益を収めて居た上級の者等は、資本家と同じく労働階級の反抗的となる。それ故、上の階級の者と資本家とは互に手を握って階級制度の防禦に盡瘁し、下の階級の者と労働者とは多数を頼んで猛烈に攻め寄せる。同じ団体の内部が斯く二組に分れて相争うように成つては、之を調停して昔の世の中に戻すことは到底容易ではない。

文明の進むに随うて貧富の差が著しくなり、其の間に激しい争いの起るに至つた直接の原因は、道具が段々精巧に成つたと云うことであるが、更に其の先の原因を尋ねると、之また団体を単位とした自然淘汰が中絶したために、団体生活に必要な性質が退化したことに外ならぬ。団体生活に必要な性質とは、云うまでもなく協力一致であるが、若しも人間に此の性質が充分に発達して居たならば、仮に貧富の差が生じたとしても、富者は財産の全部を団体のために提供するであろうから、何の問題も起る訳が無い。然るに實際に於ては、此の性質が已に著しく退化して居た所へ、貧富の懸隔が急に甚だしく成つたので、社会の制度に不備の点のあることが觀面に現れ、其ため、自由平等を要求する改造の思想が盛に火の手を挙げるに至つたのである。

六

以上は、団体を単位とした自然淘汰が止んだために、階級型団体の協力一致に必要な服従性が退化して、それと同時に自由平等の考えが現れ出たことを簡単に述べたのであるが、如何なる性質でも決して突然立派なものか現れることはない。また立派なものが突然消えて無くなることもない。現れるに當つては、初め微なものから次第に発達して完全なものとなる。また消えるに當つても少しずつ衰えて終に全く痕跡を留めぬに至る。服従性は一名を階級的精神または奴隷根性と云うても宜しいが、此根性が減退して其の反対の自由

平等の精神が増加し来るのも無論一朝一夕に激変する次第ではない。所が、凡そ物が変わる時には二通りの変り方がある、一は全部が揃うて次第次第に変わって行く変り方で、他は一小部分ずつが急に變化し、終に變化が全体に行き渡る変り方である。夜が明けて明るくなるのは前者の例で、有りたけの物が同じ程度で少しづつ明るく見えて来る。之に反して、雨が降って地面が濡れるときには、地面全体の水分が何所も平等に増して終に水に蔽われる訳ではなく、初めは此所彼所と滴の落ちた所に濡れた点が出来、斯かる点が段々増して終に全部が濡れるに至る。人間が年を取るに随うて頭の毛が白くなるのも之と同様で、誰でも頭の毛が悉く打ち揃うて最初先ず濃い鼠色になり、次に淡い鼠色になり、一步一步色が淡くなつて、終に純白に成るのではない。白髪しらがの出来始めには純黒の毛の密生して居る所に、突然此所に一本、彼所に一本と飛び飛びに生じ、次第次第に其数が殖えて、一時は胡麻塩となり、更に年々白が増し黒が減つて、終に全くの白髪しらがに成り終るのである。人間の奴隸根性が退化して、自由思想の發生するのは丁度この通りである。其の初めて現れる時には、階級思想の未だ漲みなぎつて居る如くに見えて居た世の中へ、特発的に少数の新思想家が生まれ出て、それを手始めとして次第に新思想家の数が増して行く。初めて生えた白髪しらがが容赦なく抜き去られる如くに、初めて生まれた新思想家は其時の社会から迫害せられ、除き捨てられる。併し白髪しらがの生える年齢に達した以上は、幾ら白髪しらがを抜いても、後からまた白髪しらがが生えるのと同じく、新思想家の生まれる時期に達した以上は、幾ら新思想家を撲滅しても、後から直に新思想家が生まれ、且次第に其の数が増して行く。白髪しらがを隠すには白髪しらが染と云う方法があるが、新思想家に圧迫を加えて、其の意見を發表させぬことは丁度之に比較することが出来よう。写真にでも写せば見事な黒髪と見えるが、染めを落して見たら意外に白髪しらがが多いので膽きもを潰つぶすかも知れぬ。

今日の文明国は思想の方面に於ては、何れも胡麻塩頭の如き状態にある。甲の国と乙の国との相違は、ただ黒が多いとか、白が多いとか云う程度の差別に過ぎぬ。同じ頭に黒い毛と白い毛とが隣り合うて生えて居る如くに、古い思想の人と新しい思想の人が、軒を並べて生活して居る。されば、此等の人々が銘々自分の思うことを発表すれば、種々様々の相異なつた意見が出て、其の間に激しい衝突の起るは勿論である。先達て『読売新聞』に「偉人出でよ」と云う題の投書が出たことがあつたが、其の翌日には「偉人拒避」と題する右の反駁文が出た。偉人出でよと云うのは、我は喜んで、其人に服従すべしと云う意味が無論籠つて居る故、これは階級的精神の未だ退化せぬ人の声である。之に反して、偉人拒避と云うのは、同じ人間を自分の頭の上に戴くことを屑いさぎよしとせぬのである故、これは自由平等を求める叫びである。斯様に全く相反する思想が同じ新聞に続いて出るのを見ても、今が胡麻塩時代であることが明かに知れる。一方に華族廃止論を唱える者があるかと思えば、他方には正三位何某を会員募集の看板に担ぐ者があり、彼所かしこでローマ字の採用を主張すれば、此所こゝでは漢字の廃すべからざることを説いて居る。神社に御詣りせよと教える教師があれば、偶像を礼拝すべからずと論さとす牧師があり、公爵でも伯爵でも用があれば其方から来いと威張いばる論客もあれば、男爵閣下の御親筆を大切に保存して居る村長もある。其の他、雑誌を読んでも、講演を聞いても、往來を歩いても、宿屋に泊つても、人々の考え方が如何に様々であるかと云うことに心附かずには居られぬ。今日の思想界は実に渾沌たる状態にあつて、此の先、如何に片付くやら全く分からぬと云う不安の感じが誰の頭にもあるらしく見える。

七

単に現今の有様だけを見ると、斯か様に渾沌かようたる如くに思われるが、之を生物学の方面から考えると、決して無規律に渾沌たる訳ではなく、其所そこには斯かく成らざるべからざる理由があつて、豫定の通りに此の状態に達したものであることが知れる。前にも述べた通り、人間の団体は初め小さかつた頃には、自然淘汰がよく行われて、其の間は団体生活に適する性質が絶えず発達した。然しかるに其の後、団体が次第に大きく成つたために、自然淘汰の働きが鈍くなり、終ついには全く止んで、其時から団体生活に適する性質が段々と退化し來つた。元來が団体生活を営む動物でありながら、団体生活に適する性質が退化するように成つては、之は最早もはやその種族の運命の下り坂と見做みなさねばならぬ。斯かく觀察すると、人間の今まで経過し來つた道筋は、之を図式に画あげば、恰あたも拋物線の如き形を現あらわすことが出来る。即ち初めのは上り坂で、後には下り坂となり、頂上の所だけが稍々やや円い。上り坂は自然淘汰の働きによつて、団体生活に必要な協力一致の性質が段々発達しつゝあつた時代に相当する。頂上の円い所は自然淘汰の働きが衰えて、協力一致の性質の進歩が大いに鈍く成つた時代に相当する。而しかして下り坂の方は、其の後、次第に此の性質が退歩し來つた時代を代表する。飛行機、潜水艇、エツキス光線(X線。レントゲンが発見した電磁波で光ではない)、無線電信と、新しい器械が続々と發明せられ、文明が急速力で前進する有様を目前に見ながら、人間は今、已すでに下り坂の途中にありと云うのは、如何にも奇を好む説の様に聞えるかも知れぬが、人間を単に一種の団体動物と見做みなし、他の動物に対するのと同一の論法を以て判断を下せば、斯かく考える外ほかに道は無い。但ただし之は我ら一人の説であつて、生物学者にも、生物学者以外の人に、之に賛同の意見を發表した者は未だ一人も無いように記憶する故、その積りで読んで貰わねばならぬ。

さて、人間の今まで経て来た道に上り坂と下り坂とが有ったとすれば、今日の人間の有する性質の中には、上り坂の時代に発達したものと、下り坂に成つてから発達したものとがあるべき筈である。耳を動かす筋肉や、盲腸の虫様垂が、不用に成つてからも長く形を留めて居る如くに、一旦出来た性質は時代が變つても決して直に消え失せるものではない。それ故、上り坂の際に発達した性質は、下り坂に成つて後も長く繼續して、新に出来た性質と並び存する。上り坂の頃に発達した性質とは、自然淘汰によつて養成せられた団体的の性質で、協力一致の実を挙げるに必要なものである。例えば同情とか、博愛とか、上の者に服従するとか、弱者を助けるとか云う如き性質が皆その仲間に属する。之に反して下り坂になつてから発達した性質は、何れも協力一致や服従の性質の退化に伴うて現われ来つたもの故、丁度その反対の性質を帯びて居る。即ち個人主義とか利己主義とか、自由とか独立とか云うのが、その著しい例である。此等の相反する種々の性質が並び存して居ることを思えば、人間の為すことに矛盾の多いのは無理はない。而も、上り坂の性質と下り坂の性質とは明に二組に分れて相反するとは限らず、一人で個人主義と服従性とを兼ね備えて居る者も出来れば、自由と博愛とを理想とする者も出来る。それ故、人間社会の矛盾は更に複雑になる。併しながら、上り坂に発達した性質に基づく思想と下り坂に発達した性質に基づく思想とは根本的に正反対のものである故、一々の思想の内容を調べて見れば、それが何れの組に属するかを判断することは決して困難でない。

我らの見る所によれば、今日の人間は已に長らく団体を単位とした自然淘汰の働きが中絶したために、団体生活に必要な性質を餘程失うて居る。即ち、昔に比べると、生まれながらに有する協力一致の性質が大いに退化した。協力一致をせずには居られぬと云う先天的の性質が退化すれば、団体生活の何れの方面にも著しい缺陷の生ずるは止むを得ぬことで、恐らく之を防止する方法は無からう。今日世間に喧しい政治問題とか

經濟問題とか労働問題とか思想問題とか其の他、何問題、何問題と数え切れぬほどある問題も畢竟は皆、協力一致の性質の退化したために生じたもの故、之は一括して団体生活問題と名づけることが出来る。斯様に無数の問題が生じて、社会生活が次第に困難に成り行くのは、我らから見れば、全く人間の団体が大きく成り過ぎたために、自然淘汰の働きが無くなった結果であると思われるが、此点に心附かぬ人等は、責任を互いに譲り合い、恰も今回の欧州大戦（第一次世
界大戦）で、ドイツはイギリスが悪いと云い、イギリスはドイツが悪いと云うて、互いに罵り合う如くに、誰も彼もが自分以外の者に罪を負わせようと努めて居る。二、三日前の新聞に御経を豫約で出版する広告文の冒頭として、「科学文明の積弊その極に達し」云々と云う文句が見えたが、宗教家は今日の社会の缺陷を悉く科学の進歩に押し付けようと欲するらしい。併し同じ新聞の裏の頁に、高野山で大中学校の生徒が結束して、管長、学長に辞職勧告をしたと云う通信が出て居た所を見ると、積弊が其の極に達したものは強ち科学文明のみには限らぬ様である。世が次第に末に成り行く真の原因を知らぬ人等は、何でも手近にある物の中で、自分の氣に入らぬものを、其の原因であると誤り信じ、頻に之に喰うて掛るかが、之は
おとしあな 窠に掛つた獅子が怒つて、傍らにある物に何でも噛み附くのと同じく、真の敵が誰であるかを知らぬために生ずる過ちである。今日の思想界には旧い思想と新しい思想とが入り乱れて存する上に、各自が皆この様な誤りに陥つて居る故、その渾沌の状を呈するは当然であるが、丸めた糸屑を解く心持ちになつて、氣長に各種の思想の系統を選び分け、誤りの横枝を切り離しなどしたならば、実は決して、無茶苦茶に渾沌たる訳ではなく、一々斯く成らざるべからざる理由のあることを見出すであろう。

以上一通り、自由平等の由来に關する我らの考えの大略を述べたが、其の序^{ついで}を以て、自由、平等の将来に就いて我らの思う所を附け加えて置く。前に述べた通り、今日世の中にある思想の中には、人間の上り坂の頃に發達した性質に基づくものと、人間の下り坂に成つてから發達した性質に基づくものとの二種類があるが、此等の思想は今後如何に成り行くであろうかと云うに、前者は、ただ前世紀の遺物として生存し続けて居るだけのもの故、将来更に盛になる時があるとは思われぬ。如何に宗教家や教育者が骨を折つても、同情心や服従性の如きは、恐らく緩々^{ゆるゆる}と退化し行くの外に途は無いであろう。後者は之に反して、時の進むと共に益々勢を得て、反对者が如何に防禦に努力しても、到底その蔓延することを遮り得ぬであろう。自由とか平等とか云う思想は後者中の代表的のもの故、今後何所^{どこ}までも盛に成るべきは云うを俟^またぬ。

自由平等の思想が、世間一般に広がつたならば、如何なる世の中が生ずるであろうかと云うに、我らは今日の社会生活の缺陷は、生物学上、極めて深い所に其の原因が存すると考える故、たとえ、新しい思想に基づいて、社会制度の改革を行うたとしても、それで救済が出来るものとは決して思わぬ。今まで社会の改造を企てた人は幾人あるか分からず、また改造の出来上つた暁の有様を想像して、小説体に書き綴つた書物だけでも已^{すで}に何十種類もある。斯^かく云う我らも、廿一、二歳の頃に「ナイランド^(無^い土地^{land} || 無^い土地^{land} ユートピア)の^(土地^{land} || 無^い土地^{land} ユートピア)ことか」旅行記」と題して、此の種の夢物語を幾枚か書き始めたことを覚えて居る。現代の社会の欠陥を指摘して、其の改良の方策を論じた書物に至つては到底枚挙に^{いとま}遑^{あせま}が無い。併^{しか}し、何れの書物を読んで見ても、現代の缺陷を指摘してある所は如何にも痛快であるが、之を救うべき改造案の方は、誰のも皆夢の如くで、一つとして、実地

に応用の出来るものは無い。何故と云うに、斯かる書物の著者には、人類の生まれながらに有する協力一致の性質が次第に退化すると云う点に心附いた者が一人も無いからである。此の極めて肝要な点を忘れて居る故、誰も自分の唱える改造案が一種の夢に過ぎぬことに気が附かぬ。之は今までに書かれた理想郷の書物に共通の缺点であつて、今後出版になる同種の書物にも恐らく悉く、この缺点が見出されるであらう。我らは一昨年（一九一八年）七月の『太陽』誌上に「戦後に於ける人類の競争」と題する一篇を掲げて、其中に、「さて今回の戦争（第一次世界大戦）が終つた後には、兎も角も一時は平和の姿となるであらうが、之とても無論真の平和ではなく、国と国との戦が止めば、今度は国の内での紛擾が高まる。今まで自衛上、止むを得ず合同して居た異民族間の権力争いや、併合せられた民族の主権国に対する反抗なども盛に現われるであらうが、最も激烈に起るのは、恐らく中世以来の世襲の特権階級に対する一般人民の争いや、資本家に対する労働者の争いなどの如き人為階級間の戦いであらう。此等は何れも面白からぬ事のみであるが、人智が進めば、斯かることの生ずるを免れず、除けて進むことも、飛び越えて行くことも出来ぬ厄介至極な難関である」と述べて置いた。之は人間は今下り坂にあつて、協力一致の性質が追々退化するとの考えから斯く豫言したのであつたが、其の後の事實は不思議なほど一々豫言の通りとなつた。

自由、平等と云うことに就いても、我らは決して、之によつて理想の世界が現出しようとは思わぬ。自由平等を熱心に叫ぶ人は、之によつて世の中を善くしようと考えて居るのであらうから、其の動機は甚だ貴い。また自由平等の思想は今後益々盛になるであらうから、之を得ねば満足せぬ人間が非常に多く成るに違いない。併しながら、自由平等を目標として社会を改造したならば、果して理想通りの世の中となるや否やは頗る疑わしい。何時までも現状のままに継続することは、多くの人の到底堪えられぬ所である故、是非とも之

を打破しなければならぬが、然らば如何に改造すべきかと云うと中々名案が出ない。協力一致の性質が退化した人間が集まって居る以上は、自由は隣りの迷惑を構わぬ乱暴な自由となり、平等は何とも始末の付かぬ悪平等と成る虞おそれが有る。特に今まで長い間、服従を強いられて居た階級に急に権力が移ったならば、反動として如何なる狼籍が始まるやら分からぬ。されば、何れの文明国いづも当分は、現状打破と改造難との板挟みとなつて、苦むことであろうと推察する。自分の住む社会を善することは、無論誰も努力せねばならぬことで、皆が努力すれば必ずそれだけの効果は挙がるべき筈はずであるが、餘程の名案が出ぬ以上はアルツイバシエフの小説にある労働者シェヴィリヨフが云うた如くに、「新しい世の中は来るであろう、……より善き世の中は決して」と云う結果を見るに止まるであろう。

(大正八年十一月)

(大正九年一月『雄辯』所収)

- 『煩悶と自由』（大日本雄辯会、一九二二年二月）所収。
- 読みやすさのために、旧かな遣いは新かな遣いに変更し、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。
- PDF化にはL^AT_EX_{2 ϵ} でタイプセッティングを行い、dvi₂pdf₂を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。